

今年の6月から犬猫のマイクロチップが義務化されましたね。ペットショップで購入する犬や猫にはマイクロチップが装着され飼い主の情報などを国に登録する必要があります。災害などで生き別れになった迷いイヌや、盗難にあって見つかった猫が飼い主のもとに帰れる確率が上がるでしょう。しかし実際の目的は、殺処分の減少です。2020年には犬と猫を合わせて2万3764頭(犬4059頭、猫19705頭)一日65頭の殺処分行われています。コロナ禍でペット購入者が増えていると聞きます。これからは飼い主の「責任なきひとめぼれ」で安易に購入される犬や猫を減らさなくてはなりません。まさに「その一目惚れ」まさに迷惑なのかもしれません。

医療の現場では、軽度の感染症などに対して安易に抗生物質を使用することで耐性菌が発生する問題が発生しています。耐性菌の筆頭はMRSA(メチシリン耐性黄色ブドウ球菌)ですが、最近ではVRE(バンコマイシン耐性腸球菌)、MDRP(多剤耐性緑膿菌)、VRSA(バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌)などがあり5壘感染症に属します(全数調査対象で保健所への連絡が必要)。当院ではVRE症例が発生し対策が求められています。

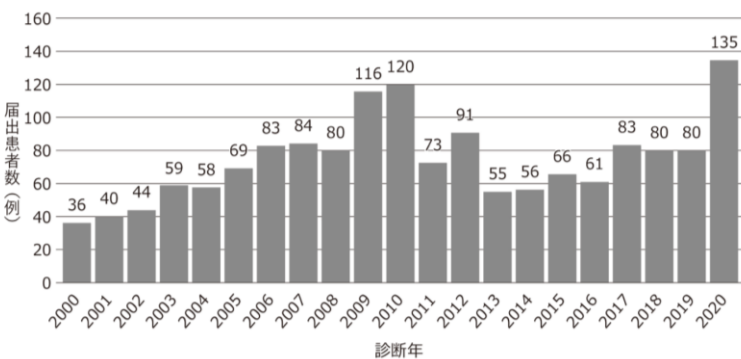


図1. 感染症発生動向調査におけるバンコマイシン耐性腸球菌感染症の年別届出患者数、2000～2020年(2021年1月25日時点)



腸球菌は主に腸管に存在するので感染経路は主に接触感染。便や尿の処理の際に注意が必要になります。

VREは弱毒菌。健常者にはほとんど影響がありません。しかし、免疫力の低下した血液透析、悪性腫瘍の患者などに感染すると致命的になります。



VREはバンコマイシンが効かなくなった腸球菌で1980年代に欧州で出現しました。発生には家畜の飼料添加用成長促進剤として餌に加えられた抗菌薬の使用に関連していることが疑われています。米国では1989年のVREは腸球菌全体の0.4%でしたが1995年には10%になり急激に増え最近では80%を超えるのだという報告もあります。日本では2010年をピークに減少しましたが近年増加傾向にあります。

日本は米国欧州に比してVRE分離率は低い

国	分離率 ¹⁾	判定基準	引用文献
米国	79.4%	VCM $\geq 32\mu\text{g/ml}$, CLSI	CDC, NHSN 2009-2010年 ²⁾
欧州	8.9% (0-42.7%)	CLSI, EUCASTなど国による	ECDC, EARS-Net 2013年 ³⁾
韓国	25.9-41.7%	不明	KCDC 2009年 ⁴⁾
日本	0.7%	VCM $\geq 32\mu\text{g/ml}$, CLSI	JANIS検査部門2013年 ⁵⁾
	1.4%	VCM $\geq 16\mu\text{g/ml}$, 感染症法	

日本がVRE分離率が低い理由として考えられる要因

1. 米国では臨床現場におけるバンコマイシンの使用量が日本よりも多い。
例)バンコマイシン使用量(2002年):米国19547kg、日本2692kg
2. 日本の臨床現場では、VREが分離された場合、保菌者であっても隔離等を厳密に行い院内での拡散阻止に取り組んでいる。分離率が低いため実施可能。

1) E. faeciumにおけるvancomycin耐性菌株数 / vancomycin感受性測定菌株数
2) Sievert DM et al. Infect Control Hosp Epidemiol 2013;34(1):1-14.
3) <http://www.ecdc.europa.eu/en/activities/surveillance/EARS-Net/Pages/index.aspx>
4) Yoon YK et al. J Antimicrob Chemother 2012; 67(12):2963-9.
5) <http://www.nih-janis.jp/report/kensa.html>

国立感染症研究所提出資料

当院ではVRE症例が短期間で3例発生したために保健所からの調査を受けています。年間130例程度しか報告されないVRE症例が当院だけで3例発生していることを重く受け止め、我々はこれからVRE症例が拡散しないように以下のことに注意していく必要があります。



- 患者及び保菌者に対する接触感染予防策・標準予防策の徹底
→(衣類の脱着、感染物、汚物処理などの研修会を予定しています)
- 抗菌薬の適正使用の再確認
→(安易にバンコマイシンを使用しない。使用する際には薬局と連携しMRSA感染の確認を徹底する)
- 対象者の的確な抽出、患者及び保菌者の隔離、固定化
→(現在スクリーニング検査を尿と便で実施中。保菌者が見つかった場合は隔離が必要)
- 入院時及び退院時の保菌検査
→(入院時にすでに保菌状態にないか、退院時に保菌していないかの確認を行っていく予定です)



みんなで協力し、当院からのVRE根絶にむけて頑張っていきましょう。